イースター礼拝説教「本当に、よみがえられたのです」予稿

日本基督教団石神井教会　2017年4月16日

【使徒書日課】ローマの信徒への手紙　6章3～11節

3それともあなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスに結ばれるために洗礼を受
けたわたしたちが皆、またその死にあずかるために洗礼を受けたことを。4わたしたちは
洗礼によってキリストと共に葬られ、その死にあずかるものとなりました。それは、キリ
ストが御父の栄光によって死者の中から復活させられたように、わたしたちも新しい命に
生きるためなのです。5もし、わたしたちがキリストと一体になってその死の姿にあやか
るならば、その復活の姿にもあやかれるでしょう。6わたしたちの古い自分がキリストと
共に十字架につけられたのは、罪に支配された体が滅ぼされ、もはや罪の奴隷にならない
ためであると知っています。7死んだ者は、罪から解放されています。8わたしたちは、キ
リストと共に死んだのなら、キリストと共に生きることにもなると信じます。9そして、
死者の中から復活させられたキリストはもはや死ぬことがない、と知っています。死は、
もはやキリストを支配しません。10キリストが死なれたのは、ただ一度罪に対して死なれ
たのであり、生きておられるのは、神に対して生きておられるのです。11このように、あ
なたがたも自分は罪に対して死んでいるが、キリスト・イエスに結ばれて、神に対して生
きているのだと考えなさい。

【福音書日課】ヨハネによる福音書　20章1～18節

1週の初めの日、朝早く、まだ暗いうちに、マグダラのマリアは墓に行った。そして、
墓から石が取りのけてあるのを見た。2そこで、シモン・ペトロのところへ、また、イエ
スが愛しておられたもう一人の弟子のところへ走って行って彼らに告げた。「主が墓から
取り去られました。どこに置かれているのか、わたしたちには分かりません。」3そこで、
ペトロとそのもう一人の弟子は、外に出て墓へ行った。4二人は一緒に走ったが、もう一
人の弟子の方が、ペトロより速く走って、先に墓に着いた。5身をかがめて中をのぞくと、
亜麻布が置いてあった。しかし、彼は中には入らなかった。6続いて、シモン・ペトロも
着いた。彼は墓に入り、亜麻布が置いてあるのを見た。7イエスの頭を包んでいた覆いは、
亜麻布と同じ所には置いてなく、離れた所に丸めてあった。8それから、先に墓に着いた
もう一人の弟子も入って来て、見て、信じた。9イエスは必ず死者の中から復活されるこ
とになっているという聖書の言葉を、二人はまだ理解していなかったのである。10それか
ら、この弟子たちは家に帰って行った。

11マリアは墓の外に立って泣いていた。泣きながら身をかがめて墓の中を見ると、12イ
エスの遺体の置いてあった所に、白い衣を着た二人の天使が見えた。一人は頭の方に、も
う一人は足の方に座っていた。13天使たちが、「婦人よ、なぜ泣いているのか」と言うと、
マリアは言った。「わたしの主が取り去られました。どこに置かれているのか、わたしに
は分かりません。」14こう言いながら後ろを振り向くと、イエスの立っておられるのが見
えた。しかし、それがイエスだとは分からなかった。15イエスは言われた。「婦人よ、な
ぜ泣いているのか。だれを捜しているのか。」マリアは、園丁だと思って言った。「あな
たがあの方を運び去ったのでしたら、どこに置いたのか教えてください。わたしが、あの
方を引き取ります。」16イエスが、「マリア」と言われると、彼女は振り向いて、ヘブラ
イ語で、「ラボニ」と言った。「先生」という意味である。17イエスは言われた。「わた
しにすがりつくのはよしなさい。まだ父のもとへ上っていないのだから。わたしの兄弟た
ちのところへ行って、こう言いなさい。『わたしの父であり、あなたがたの父である方、
また、わたしの神であり、あなたがたの神である方のところへわたしは上る』と。」18マ
グダラのマリアは弟子たちのところへ行って、「わたしは主を見ました」と告げ、また、
主から言われたことを伝えた。

イースターにたどり着く

イースターの朝です。太陽はすでに高く昇っていますが、イースターの祝いは、朝の祝いです。イースターの祝いの朝を迎えました。主イエス・キリストのよみがえられた朝です。キリストの復活のいのちに、わたしたち皆があずかる朝です。「キリストはよみがえられました」。「キリストは、本当に復活なさいました」。そう呼び交わしながら、二千年間、教会で毎年祝われてきたイースターの朝です。

ようやく、ここに、たどり着きました。わたしどもも、早くこの朝、イースターの朝を迎えたいと願っていました。昨年の 4 月、イースターの翌週から、わたしどもは、皆さんと共に歩ませていただいて来たのです。この一年、何よりも、皆さんがどのようにイースターを迎え、祝われるのか、そのことを早く知りたかったのです。わたしどもも、皆さんも、同じイースターの信仰に立っていること、イースターの復活のいのちによって立たされていることを、確かめ合いたいと願っておりました。

この祝いの日を迎えるために、備えの季節、「受難節」の 6 週間余りを共に歩んできました。普段の礼拝、集会に加えて、「受難節」の祈りの集まりを、ここで重ねてきました。「灰の水曜日」から「受難日」までの合計 9 回の祈りの営みを、皆勤でご一緒に重ねてくださった方もいらっしゃいました。その祈りの営みに加わることができなかった皆さんも、主日の礼拝ごとに、祈り整えられて、この日を迎えてくださったことと思います。イースター、主のご復活を祝うために、備えの祈りを重ねてきてくださったのです。

その備えの祈りの季節を迎えた最初に、皆さんにお知らせしたとおり、今日、この祝いの中で、一人の方が洗礼の恵みにあずかられる喜びをも与えられています。わたしたちの誰よりも、その方こそ、この日を待ちに待って迎えられたことでしょう。皆さんにお知らせする前から、何カ月もの準備のときをご一緒に過ごしていただいてきていました。そして、ようやく、この日にたどり着いたのです。

皆さんの中に、その方が洗礼に向けての準備を始めてくださっていることを早くから気づいてくださっていた方がいらっしゃいました。「クリスマスに洗礼を受けたらよいのに」とお勧めくださった方もあったようです。クリスマスの洗礼式も、うれしいものです。わたし自身、かつてクリスマスの祝いの中で洗礼を授けていただきました。牧師としても、クリスマスには洗礼式を執り行わなかったことのほうが少ないのです。けれども、牧師として洗礼を授けさせていただく特別な役割に仕えさせていただいてきて、段々と、洗礼式はできればイースターのほうがよい、と思わされるようになってきました。教会は、最初の時代から、イースターの祝いの中で洗礼式を執り行うことを、本当に大切にしてきたからです。

使徒パウロはローマの信徒への手紙で、洗礼はキリストと結ばれること、わたしたちは洗礼によって、キリスト共に死んで葬られ、そして、キリストと共に死者の中から復活させられ、新しい命に生きるようになる、と教えます。イースターに、わたしたちは、キリストの死と復活を記念します。そして、わたしたちの死と復活をも記念する。洗礼が、わたしたちをキリストと結びつけるからです。

天使が見える

イースターの記念の中に、洗礼を受けられる方が与えられているのは、幸いなことです。一人の人に洗礼が授けられるとき、わたしたちは、死んで復活なさった方の姿を見るのです。古い時代の教会では、洗礼を授けられる者は、洗礼の水の中から引き上げられると、真新しい真っ白の衣が着せられたのだそうです。洗礼によってキリストの死と復活のいのちに結ばれた者は、神の栄光に包まれて白く光り輝くキリストを衣のように身にまとう、ということを示すためです。

すでに洗礼を受けた皆さんは、キリストと結ばれて、そのような真っ白の衣を身にまとっていらっしゃる。白い衣を着た者として、教会に集められていらっしゃる。もちろん、皆さんがキリストと同じだ、とは言えないかもしれない。けれども、キリストと似た者になるようにと、皆さんは、洗礼の白い衣を着せられたのです。少なくとも、皆さんは、キリストを探し尋ねて、見つけられずにいる周囲の人たちの傍らで、キリストを指し示す者として立たせていただくために、洗礼の白い衣を着せられていらしたのです。

「**主が取り去られました。どこに置かれているのか、わたしには分かりません**」。マグダラのマリアは、イースターの朝、主イエスが十字架で死なれた後に葬られた墓を訪ねていました。大切な方の死を前にして、マリアは、せめてものことをそのご遺体に対して施したいと願っていたのでしょう。他の福音書が伝えている通り、そうしたのは、マリアだけではなく、幾人かの婦人たちでした。彼女たちは、香料や油を買い求めて、墓に向かったのです。ところが、ヨハネ福音書は、そのような彼女たちの目的について、何も触れていません。ただ、マリアが墓に行った。そして、墓の入口の石が取りのけてあるのを見つけ、そして、墓の中に主イエスのご遺体がないことを発見し、ひどく落胆した、ということを繰り返し伝えるばかりなのです。

これは、マリア自身の証しなのでしょう。マリアは、他の婦人たちと一緒に、香料や油を買い求めて、墓に向かったのです。けれども、彼女の目的は、ご遺体に香料や油を塗ることではなかったのです。墓に葬られた主イエスのご遺体を確かめること。大切な主イエスの存在を、自分の手の届くところで確かめること。そのために、マリアは墓に向かったのです。ご遺体であったとしても、自分の手の届くところにあってほしかったのです。手放したくない、自分にとって大切な主イエスという存在があったのです。けれども、マリアは、そのような、自分の手の届くところに置いておきたいと願った主イエスを、取り去られてしまったのです。取り去られなければならなかったのです。

皆さんには、そのような経験はないでしょうか。長く教会に通っていて、大切な存在として主イエスを見ていたのに、あるとき、その主イエスが取り去られてしまうのです。分からなくなってしまうのです。今まで見ていたはずの主イエスが、どこにも見えなくなってしまうのです。

そのとき、白い衣を着せられた人のほんの一言が助けになったということは、なかったでしょうか。マリアには、助けになったのです。

「わたしは主を見ました」

白い衣を着た天使。その天使は、何も、背中に羽の生えた中性的で神々しい存在でなくてもよいのです。マリアが見た天使も、そのような天使だったとは、一言も伝えられていません。ただ「**白い衣を着た**」者だったというだけです。

自分の主イエス。自分の手の届くところに置いておきたいと願う主イエス。そのような主イエスは、マリアのもとから取り去られなければならなかったのです。主イエスが十字架で死なれ、墓に葬られ、しかし、その墓の中にも見つけることができなかったというのは、そういうことです。主イエスは、マリアの手の届くところからは、離れ去って行かれたのです。そのような者としてマリアのものにされることを、主イエスは良しとされなかったからです。

主イエスというお方は、不思議なお方なのです。キリストという存在は、不思議な存在なのです。わたしたちの願うようには、わたしたちの元に留まってくださらないのです。わたしたちには、こうあってほしいと願う主イエス像があるのです。理想のキリスト像があるのです。優しくて、いつも静かに傍にいてくださって、悩み深いときには慰めを与えてくれるような主イエス・キリストです。そして、確かに、聖書を読み、説教を聞いて、そのような主イエスとの出会いを与えられるということが、ある。ところが、そのような主イエス・キリストが、何かの拍子に、スルリとわたしたちの手からすり抜けていってしまうことがある。わたしたちが考えていた主イエス像、キリスト像が、ガラガラと崩れ去ってしまうことがある。それは、必要なことなのでしょう。マリアの手からキリストが、「**わたしの主**」が、ひとたび取り去られたように。けれども、それは、永遠にキリストが見えなくなることではありません。もう一度、本当の主イエスのお姿を見出すようになることなのです。

「**わたしは主を見ました**」と、マリアは、他の弟子たちに証ししました。それは、マリアが期待していた主イエスではありませんでした。マリアが墓の中に見られると期待していた主イエスは、取り去られたのです。それは、マリアが自分の手で抱きしめておこうとしていたキリストでもありませんでした。マリアが引き取りたいと願ったキリストは、取り去られたのです。マリアが見たのは、主ご自身がお示しくださった主イエス・キリストなのです。マリアが探して見つけたのではなく、主がマリアを訪ね見出してくださった、そして「マリア」と名を呼んでくださった、そのようにして見ることになった主イエス・キリストなのです。

今日、一人の方が、主に見いだされ、名をお呼びいただいたことに気づかれ、それに応えて、洗礼にあずかります。洗礼は、自分の神を選んだ決断の結果ではありません。それは、神が選び出してくださり、名を呼んでくださった結果です。そこに、死者の世界から引き出され、神の永遠のいのちの世界に生かされるようになる道が、備えられています。キリストが備えてくださいました。死んで復活なさったキリストが、道となり、真理となり、命となってくださったのです。

キリストは、本当に、死んで、よみがえられました。よみがえりのキリストが、今から、一人の人の名をお呼びくださり、ご自分のものにしてくださいます。